強迫症状を訴える50代女性との面接過程
－コラージュ・ボックス法を通して－

仲　沙織

キーワード：コラージュ・ボックス法，強迫性障害，臨床心理職
アウトリーチ

Ⅰ．問題と目的

強迫性障害（Obsessive-Compulsive Disorder；OCD）は，生涯有病率1～2%で，男女比はほぼ同等，平均発症年齢は20歳前後の疾患である。しかし，初診に至る年齢は30歳頃とされており，発症後かなりの期間，症状と葛藤して抵抗を繰り返す中で，心身ともに疲労困憊し引きこもるなど，社会機能，あるいは生活上の支障が重大化してからが多いとされている（松永，2012）。筆者は，本疾患を長年抱え，医療中断や転院を繰り返していた50代女性へ，訪問看護の中でコラージュ・ボックス法を導入した。

コラージュ療法には，ピクチャーマガジン法，コラージュ・ボックス法，大コラージュ法，相互コラージュ法などがあり，その他にも台紙やパーツの工夫，パソコンの使用など様々に展開されており，まだまだ技法自体も発展途中である。本事例で導入したコラージュ・ボックス法とは，「持ち運べる箱庭」（森谷，1988,1993,2012）として開発され，「表現活動全体に含まれる楽しさや面白さといった‘遊びの要因’を通して豊かな内的世界が展開される（中原，2011）」我が国独自の心理療法である。コラージュ・ボックス法では，あらかじめセラピスト（以下，Th.と表記）がクライエント（以下，Cl.と表記）のアセスメントをもとに，種々のパーツを準備し，その順番を吟味して箱（ボックス）に入れておく。準備段階からTh.とCl.との対話が開始されており，この部分で，他のコラージュ技法と大きく異なる。

また，本事例では，コラージュ・ボックス法施行の際，その日の気分で

Cl.が選択したアロマオイルを使用した。本事例の施行法とは異なるが，アロマとコラージュ療法を組み合わせたものに，2009年7月，宇都宮市で生まれたアロマコラージュ療法がある。アロマコラージュ療法は，アロマテラピーの精油を用いてフレグランスを制作し，その香りの世界をコラージュ作品で表現するものであり，その有用性について報告が重ねられている（福島，2011，2015a，2015b）。

本事例は，強迫性障害を抱え，不潔恐怖のために外出や買い物，他者との交流が難しく，日常生活に支障をきたしていた50代の女性Aさんである。医療中断，転院を繰り返し，訪問看護の指示は出たものの，自宅へ支援者を入れることができず，訪問看護ステーション内面接室でコラージュ・ボックス法を実施し，計5作品を制作した。約10ヵ月の支援を通して，コラージュ・ボックス法を体験したAさんの内的世界の変化のプロセスについて検討することを目的とする。なお，事例については，個人情報保護のため内容を改変している。

Ⅱ．事例

1．事例の概要

Cl.：Aさん，50代女性

家族構成：独居。両親共に他界，妹は他県で世帯をもっている。

既往歴：40代の頃強迫性障害の診断を受け，通院，投薬開始。しかし程なく治療中断し，クリニックや病院を転々とする。

訪問看護導入の流れ：治療中断，転院を繰り返したのち，初診の病院へ再来するが，月1回の通院ができないときもある。主治医より訪問看護をすすめられる。本人の同意を受け，主治医より訪問看護ステーションに届いた「精神科訪問看護指示書」の「精神科訪問看護に関する竜事項及び指示事項」の欄には，「3．対人関係の改善（家族含む）」のみチェックがあり，枠外に，「よく話を聴いてあげてください」と記載があった。現在主症状に対する服薬は頓服のみである。

アセスメントと介入方針：自宅への訪問を拒否され，臨床心理士（筆者，以

下 Th.）がじっくりと話を聴き信頼関係を築いた上で，看護師，作業療法士を含めたチーム体制で外出支援や体力作りを提案していくこととなり，今後の支援方針と，訪問看護ステーション内面接室での実施について同意を得た。また，芸術的志向性が高いと感じたため，コラージュ療法を提案すると，「やってみたい」と快諾された。

面接では，長年他人関係を避け，家族へも嫌悪感情を抱き，不潔恐怖や漠然とした不安感，孤独感に苦しみ，外出もままならない A さんの抱えてきた想いを受け止め，コラージュ療法を通して，想いを共有し，自己治癒力の向上や心理的安定を目指すこととした。

面接構造：2 週に 1 回各 60 分で，最初の約 10 分は看護師が体調確認やバイタルチェック，食事や睡眠，服薬状況等の聞き取りを行った。その後約 50 分でコラージュ・ボックス法を実施した。面接室の隣の部屋はスタッフルームとなっており，看護師はその間待機し，何かあれば支援に入る体制を整えた。コラージュ製作の時間は 40 分に設定し，残りの時間で作品にタイトルをつけ，Th. と振り返りを行った。製作時間について，杉浦（1994）の調査では，35 分では足りない人が多く，1 時間で充分と感じる人が多かったとの結果が得られており，相談時間が 1 時間しかとれない場合は，「40 分から 45 分で作ってください」とあらかじめ断ってから始めると，ほぼ時間内に作成できることが多いと結論付けている。

2．倫理的配慮

倫理的配慮として，主治医及び訪問看護ステーションの管理者の承諾を得た後，A さんへ研究の目的について口頭と紙面で説明し，同意書に署名してもらった。支援の内容や A さんの状態について，毎月の訪問看護報告書で主治医に報告し，指示を仰いだ。事例の経過は，定期的なスーパービジョン及び訪問看護ステーションのスタッフミーティングやカンファレンスで管理者や全スタッフに報告し，助言や意見を求め，内省の機会及びその後の支援に活かすよう努めた。面接終了後，コラージュ 5 作品と事例について，個人が特定されな

い範囲での公開の同意を得た。

なお，本研究は，福岡大学研究倫理審査会の審査を受け，平成27年8月10日に承認を得ている（整理番号：15-07-05）。

Ⅲ．結果

パーツの準備：中原（2004）を参考に，自然風景，植物，人物，動物，食べ物，建物，乗り物，道具，宗教的なもの，その他を基本として，Cl.のその時の状態をアセスメントし，数枚ずつ準備した。また，Cl.の好みに合わせたもの，抱えている課題や葛藤を表現しているものなど数枚を加え，パーツがCl.に与える印象や刺激を考慮した順序でボックスに収めた。この手続きを毎回実施した。

道具の準備：画用紙（八つ切り），はさみ，のり

アロマオイルの準備：Cl.の好みのものを中心に，オレンジ・スイート，グレープフルーツ，サンダルウッド，イランイラン，レモングラス，ラベンダー，ゼラニウム，ベルガモット，ローズウッド，ティーツリーの10種類を準備した。その日の気分でCl.が選択し，アロマディフューザーを使用した。

1．コラージュおよび心理面接

Aさんの発言を「　」，Th.の発言を＜　＞で表記する。

<u>X年5月12日　コラージュ①：『リラックス』（図1）　アロマオイル：オレンジ・スイート</u>

慎重な手つきでパーツを扱い，手順を何度もTh.に確認する。指を何度もティッシュでぬぐう。また，終了時間を気にして何度も時計を見る。＜もし終わらなかったら次回続きもできるので，大丈夫ですよ＞と伝えるが，時折時計を確認し，終了時間きっかりで制作を終え，大きくため息をつく。

パーツは9枚，主な色彩は赤，黄，重ね貼りは海と十字架のパーツとふくろうのパーツ，夕日と海のパーツと魚のパーツの2か所に見られた。

“Relaxing　心地よい香りに包まれて安らぎチャージ”の文字とあたたかみ

のあるキャンドルが中心に配置され，穏やかな海，静かな草原，咲き誇る花々，瑞々しいトマトやびわが周囲に配置された。右上端には2つ目の海の風景が貼られる。海は黒い枠で囲まれ，手前に十字架を臨み，隣に6角形に切り取られた1羽のふくろうが重ね貼りされた。このパーツに対して，「これは私」，とふくろうを指した。

人物や複数で集う動物などは一切選択されず，裏コラージュと呼ばれる，一旦は選んでも使われなかったパーツも，自然風景や植物のみであった。

制作後，タイトルを「リラックス」と決め，「リラックスしたいです。もう疲れました」と語る。

X年5月26日　コラージュ②：『みどりの中で』（図2）　アロマオイル：ベルガモット

「（コラージュは自分に）合ってる気がします」と語る。前回制作したコラージュの映像がしばらく残っており，「あのキャンドルがここ（胸）に灯っているような気がしてました」と語る。手順や時間の確認は数回あり，指を何度もティッシュでぬぐう。

パーツは9枚，主な色彩は緑，重ね貼りは見られなかった。

中心に2匹の蛍，メイプルリーフが貼られ，側に親子の羊，小鳥が配置された。また，ヨーロッパの城，青々と茂る緑，穏やかな川と住宅，高低差があり流れの速い川，チョコレートケーキが囲んでいる。

自然風景や植物を多用するのはコラージュ①と同じであるが，前回の静かで動きがないパーツではなく，迫りくる緑や激しく飛沫を上げて流れる川など，躍動感のあるパーツが選択される。また，コラージュ①では近景であった建物が遠景になり，全貌が確認できる。人物は選ばれなかったが，住居が立ち並ぶ風景からは，生活感や人の気配が感じられる。今回も乗り物は選ばれなかった。草花，ケーキ，洋菓子，月のパーツは，一旦は選択したが，貼らずに終えた。

制作後タイトルを「みどりの中で」とつけ，「“みどり”は平仮名にしてください。その方が気分だから」と，語る。また，「前はよく海外旅行に行ってた

んです」,「森とか草原が，日本の規模と全然違うんです。空気まで透き通った緑色みたいな」と，想い出を語る。

X年6月9日　コラージュ③：『自分の時間』（図3）　アロマオイル：イランイラン

「大人の塗り絵って知ってますか」,「うつに効くと聞いたけど私にも効くかしら」とTh.に尋ねる。数年前カラーセラピーの公開講座を受講したと言う。<効く，というのは私には分からないですけど，Aさんが何か始めてみたいって思われたんだって，すごいって思いました>と伝える。人通りが少ない時間帯に，ベランダの窓を開けたり，近所の公園やお店に少しずつ外出したりするなど，日常生活の中で動きが出てきている。また,「思い切って（旅行会社のイベントに）参加してきました」と言うものの表情が優れず,「行かなきゃよかった」と言う。高齢夫婦が多く参加しており,「私みたいな若い人はいないし，一人の人もいない。場違いだった」と語る。<今日は，お話しされたいことがたくさんあるように思いましたけど，どうしましょう。コラージュではなくて，お話しの時間にしましょうか>と尋ねると,「そうですね」としばらく考え,「いえ，コラージュをします」と答える。

手順に慣れてきたようで，スムーズに作業を進める。パーツは9枚，主な色彩は青，重ね貼りは見られなかった。まず,『モモ』の一節で,“人間はじぶんの時間をどうするかは，じぶんじしんできめなくてはならないんだよ。だから時間をぬすまれないように守ることだって，じぶんでやらなくてはいけない。”というメッセージを切り取り,右上に配置する。中央にチョコレートケーキとハート型にくり抜いた小石の集まりを配置し，雪化粧をした山の風景，羊の群れ，ヨーロッパ風の住居，山々の景色を眺めている後姿の男女，青い海底でスキューバダイビングをする二人，街中の噴水が周囲に貼られた。

制作後,「この言葉，私のことですよね。この30年何やってたんだろう。返して欲しい…」と涙ぐみ，タイトルを「自分の時間」とする。

X年6月23日　心理面接　アロマオイル：オレンジ・スイート

「今日は，お話しでもいいですか」とTh.に尋ね，コラージュはお休みとする。

「これ，○○さん（Th.の名前）に見てもらいたくて」と，10代後半の頃の写真を10枚程封筒から取り出す。花柄のワンピースを着て，友人らしき女性や男性と一緒に並び，生き生きと満面の笑みのAさんの写真や，舞台の上で演じているAさんの写真であった。「これ，私なんです。驚いたでしょ」と言うAさんに，＜すぐ，Aさんって分かりましたよ。演劇されてたんですか＞と返す。幼少期から人前で歌ったり踊ったりするのが好きで，演劇部や合唱部で活躍していたこと，芸能界に憧れ，いくつか応募して最終選考まで残ったことなど，時折笑みを交えて語る。高校卒業を控え，芸能界を目指したいと両親に相談するが猛反対を受け，止む無く地元の短期大学へ進む。休日は演劇サークルの活動に取り組んでいたが，「あの時両親が反対しなかったら，私はテレビの中で輝いていた。あの人たちのせいで，私の人生は狂った」，と，声を詰まらせる。短期大学卒業後，「いろいろあって」，カルト宗教に入信，約30年間信者たちと共に教団施設で生活し，「はっと目が覚めて，命からがら逃げたんです」，と涙を流す。両親は既に他界し，和解することはできなかった。また，遺産相続で実妹と裁判で争い，「縁を切りました」と語る。＜お一人で，ずっと頑張って来られたんですね＞と言うと，返答なく泣き続ける。前回の作品を見ながら，＜Aさんが，『自分の時間』を，少しずつ進んでいけるといいなって思います＞と伝える。落ち着くのを待ち終了する。

X年7月7日　コラージュ④：『私の好きなもの』（図4）　アロマオイル：オレンジ・スイート

＜今日は，どうしますか＞と尋ねると，「コラージュします」と言う。

慣れた手つきで作業を進める。作業途中はティッシュで指をぬぐわず，最後のみであった。パーツは12枚，主な色彩は赤，黄，青，緑で，重ね貼りは見られない。

赤いリボンのかかったプレゼントの箱と花束が最も大きいパーツを，右下に

配置する。伸びをするトイプードル，ワインとビールのグラス，ひまわり畑，星空と建物，メロンが，角を丸く切り取って貼られた。初めて乗り物が2つ選ばれる。雲の上を飛ぶ飛行機は右上へ，その下に洞窟の中を進む手漕ぎボートが貼られた。各パーツの隙間を埋めるように，様々な色と形のガラスの瓶が小さくくり抜かれた。パーツ数はこれまでで最も多かったが，時間に余裕を持って終了した。

「ここ，行ってみたいんです」と，洞窟のパーツを指す。海外の話しから，「飛行機が（乗り物で）一番好き」，「あっという間に別世界に行けるから」と話す。また，右下のパーツについて，「もうすぐ，誕生日なんです。誰も祝ってくれないから自分で」と，笑みを見せる。誕生日の過ごし方について，「どこかホテルのラウンジで一人で飲んでたら，素敵な紳士に声を掛けられたりして」と笑う。「私の好きなもの」と，タイトルをつける。

X年7月21日　心理面接　アロマオイル：ラベンダー

「今日は，聞きたいことがあるので」と，コラージュはお休みする。

「海外旅行に行こうか迷ってるんです」と，いくつかパンフレットを取り出す。以前旅行会社のイベントに参加したが，その後担当者から何度か案内の電話がきていたと言う。思い切って担当者に，海外へ行きたい気持ちはあるけれど，他人と一緒に過ごしたり食事したりすることができないし，不衛生な場所が耐えられないことを伝えた。すると，担当者は親身になって話を聴いてくれ，自分に合ったプランを立て紹介してくれた，と語る。今の気持ちを尋ねると，「昔から行きたかった所なんです。でも，自分がどうなってしまうか不安です」と，言う。申込金の締切まで，もう少し考えてみることとなる。

面接の帰りに，スーパーマーケットに寄り買い物をしたり，図書館へ出掛けたりしたことを話す。スーパーマーケットではカートやカゴが触れず，両手に持てる分しか買えなかったことや，図書館で借りた本をベランダで虫干ししてから使い捨てビニール手袋をして読んだことなど，「私はまだ全然だめ」と否定的に語る。出掛けられたこと，買い物ができたこと，本を借りることができ

たことを肯定的に伝え返すと，「そうですね。そういう風に考えられるといいんですけど」と言う。

X年8月4日　心理面接　アロマオイル：オレンジ・スイート

「今日も，お話しでいいですか」と，コラージュはお休みする。

迷っていた海外旅行を，「申し込みました」，「すごく迷って，入金の締切を過ぎてしまって，担当の人から電話がきて，一旦は止めようって思ったんですけど」と，言う。＜たくさん悩まれて決めたんですね＞に，「正直，まだ迷ってます。これでよかったのか。向こうで症状が強く出たらどうしたらいいのか不安です」と表情を曇らせる。一緒に旅行の工程表を見ながら，細かく動きを確認する。不安がある工程を挙げ，具体的に紙に書き，後日担当者に確認することとなる。飛行機の中でパニックになったら，と心配するAさんに，何かお守りのようなものを持って行ってはどうかと提案する。「これ，少しもらってもいいですか」と，アロマオイルを指し，お守り代わりに，ティッシュに少し染み込ませ密閉袋に入れて持参することとする。

X年9月1日　コラージュ⑤：『(未完成)』(図5)　アロマオイル：ティーツリー

いつも持参するスリッパを忘れてくる。長年1足を履き続けていたスニーカーではなく，ヒールのあるターコイズブルーのサンダルを慣れない手つきで脱ぎ揃える。「すばらしかった」と，旅行の想い出を語る。広い草原に横になり，透き通る青空を眺めていたら涙があふれてきたこと，日本ではそんな不潔なことはできないのに，ベンチに座ってアイスクリームを食べたり，木陰で読書をしたり，バーで初めて会った人たちと乾杯をしたことなど，噛みしめるように話す。「あれは私だった。昔，私あんなだったんです」と言う。

続く語りに，コラージュはお休みかなと確認をしなかったが，しばらく話した後で，「コラージュしてもいいですか」と言う。時間を伝え，始める。

パーツを選ぶ間も，「この風景，いいですね」，「(旅行した場所と）似てる」，「離陸するまでが，結構長くて，満席で息ができなくて心臓が痛くなるし，（ア

ロマオイルをしみこませた）ティッシュ握りしめて神に祈ってたんです」などと，旅行のエピソードが話される。自然風景，建物，川，海，果物，洋菓子，花束，飛行機を選び，左上に旅行した場所と似ている風景を配置，画用紙の角と合わせる部分を除き，3角を丸く面取りした。左下にヨーロッパの街並みの風景を配置し，青空に小さな飛行機を飛び立つように重ね貼りした。そこで少し考え，「あ，まだ大丈夫かしら」と端を少しはがし，手のひらに載せられたフルーツタルトを挟み込んだ。

そこで時間となり，＜このままとっておきますね。また，続きをしたいと思ったらしましょう＞と言うと，「タイトル，“未完成”にしててください」と答える。時計を見て，「まだ時間大丈夫ですか」と Th. に尋ね，「これ」，と，丁寧に切り取られた“婚活パーティー”の記事を見せる。「どう思いますか。やっぱりやめた方がいいでしょうか」と尋ねる A さんに，＜A さんはどうされたいですか＞と返すと，「いい人なんて来ないとは思うんですけど」と言う。語尾に A さんの行きたい気持ちを感じ，＜けど…行ってみようかな＞と，代弁するように言うと，「まだ，迷ってるんですけど」と，はにかむ。

A さんが海外旅行で訪問看護をお休みしている間に，スタッフミーティングで A さんの状態と今後の支援方針について話し合いが持たれた。支援の受け入れが良好であること，少しずつ外出が可能になり海外旅行へも行けたこと，他者との交流への希望や期待が高まっていることなどから，看護師，作業療法士を含め，多職種チームを再編成し，自宅への訪問看護を再度チャレンジして，A さんの日常生活の場で，より活動性と自発性を高める支援を目指すこととなった。Th. から自宅への訪問看護について A さんの気持ちを尋ねると，「そうか，そうですよね。ちょっと，考えてもいいですか」，「これ（コラージュ），家でもできるんですか」，と言う。ゆっくり考えていいこと，コラージュは自宅でも可能なことを伝えた。後日，A さんより，緊張するので，まずは自宅マンションのロビーで，会うのでもいいかと電話があり，次回看護師と Th. が訪問することとなった。

X年9月15日～X年10月27日（訪問回数：3回）

Aさん自宅マンションの1階ロビーで対面する。婚活パーティーへ参加し，素敵な出会いはなかったが，帰りに一緒に参加していた年配の女性と食事をしたこと，何十年かぶりに「デパ地下」へ行ってみたこと，高くて何も買えなかったことなど語る。風邪症状を訴え，看護師に漢方薬について尋ねる。

X年11月10日～X+1年3月16日（訪問回数：10回）

Th.の提案を受け入れ，Aさんの自宅玄関への訪問が開始される。玄関のたたきに支援者，上がった所にAさんが位置し，立ち話をする。コラージュの要望はない。X年12月8日，玄関にヒーターが置かれる。X年12月22日以降，玄関のたたきに支援者用の折りたたみ椅子が用意され，お互い座って過ごすようになる。X+1年2月2日，玄関に花が飾られ，リビングへ通じるドアが少し開いている。「暖かい空気が来るから」，と，以降閉じられていることはなく，X+1年3月2日には，人が十分通れるぐらいの幅に開けられており，リビングの様子が見え家具やベランダなどの会話がなされる。年度末でのTh.の離職を告げると，「いただいてもいいですか。苦しくなったとき見たい」と，コラージュ作品を大事そうに受け取る。以降，看護師，作業療法士のチームで，訪問看護継続中である。

図1：コラージュ①

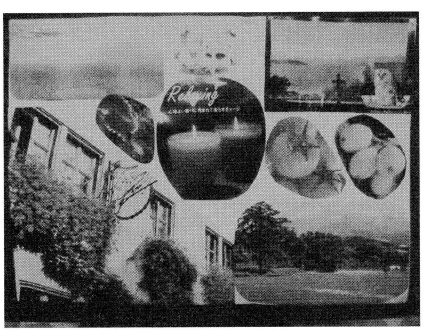


図2：コラージュ②

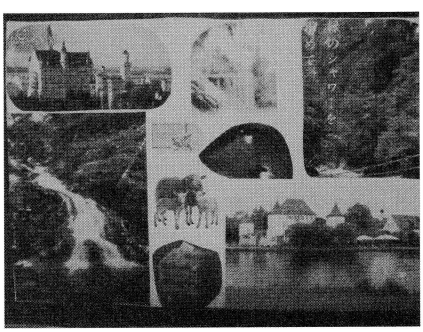


図3：コラージュ③

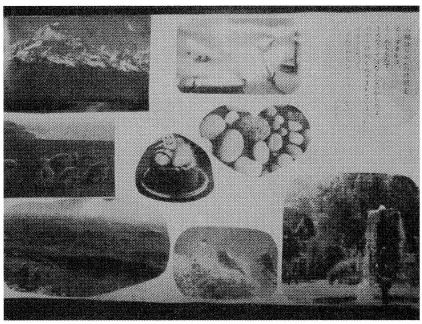


図4：コラージュ④

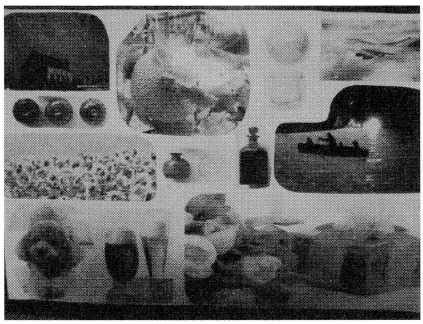
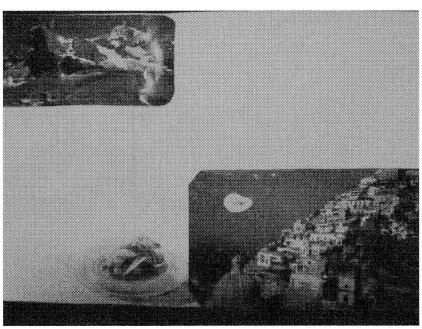


図5：コラージュ⑤



Ⅳ．考察

1．コラージュ作品の理解から見たAさんの内的世界の変化のプロセス

(1) 形式的側面

パーツ数は，未完成のコラージュ⑤を除き，コラージュ①～③で9枚，コラージュ④で12枚であった。杉浦（1994）の研究では，成人女性（29歳～50代）は，全世代で一番使用枚数が多く，19.4枚である。高齢者女性（60代～90代）の平均数は9.8枚であり，Aさんは高齢者の群に近い使用枚数である。生き生きとした日常生活から長年遠く離れて孤立していたAさんの，いわば老化した心を映した結果とも考えられる。

全作品を通してはみ出しがなく，面取りやカッティング，構成の緻密さから

はAさんの成熟性，几帳面さ，芸術的センス，統合性，自我境界の安定性が窺われた。

コラージュ①～③では，象徴的に文字メッセージが貼られた。で“Relaxing 心地よい香りに包まれて安らぎチャージ”（コラージュ①），“緑のシャワーを求めて”（コラージュ②），コラージュ③では“人間はじぶんの時間をどうするかは，じぶんじしんできめなくてはならないんだよ。だから時間をぬすまれないように守ることだって，じぶんでやらなくてはいけない。”，と，素直に自己表現されている。杉浦（1994）が，「作品の中に意味をもって使われたと思われる文字は，作者のストレートな訴えであり，事例においてはアセスメントの要素として取り上げることができる」，と述べているように，Aさんがあえて使用した文字は，Aさんの素直なメッセージであり，非言語の世界であるコラージュ作品の中で，しっかりと発信しているのではないだろうか。そのメッセージをしっかりと受け取り，Aさんの想いを理解し，支援につなげていく必要があると考える。

コラージュ①とコラージュ⑤では，重ね貼りが見られた。何かを隠すのではなく，コラージュ①“ふくろう”やコラージュ⑤“飛行機”のように，その場所にあえて置いた象徴的なものであると考えられる。

全体的に，人物を含め，生物はあまり選択されない傾向であるが，作品が進むにつれ少しずつ貼られ始めた。対人関係を避け続けてきたAさんではあるが，少しずつ他者関係に対する気持ちの変化が窺える。

図柄に合わせて大胆に斜めにカットしたり（コラージュ①），単に丸く切り取るのではなく六角形やハート型に切り取ったり（コラージュ①，③），3つの角を丸く切り取り，残した角を画用紙の角と合わせたり（コラージュ⑤），パーツや配置に合わせてカッティングが自然に工夫されており，Aさんの芸術への興味関心や芸術性の高さが窺われる。

（2）内容的側面

Aさんのコラージュ作品には，強迫症状に苦しみ家族との関係に疲れ果て，

先行きの見えない不安感や絶望感など，ネガティブなメッセージが貼られている一方で，輝いていた時期を回想し，老いを受け入れ，将来への明るい希望を抱けるようなポジティブなメッセージも貼られ，豊かに内的世界が表現された。

現実世界で疲れ果て，遠くへ行って心身を浄化したいという想いが，頻出する海外の風景（コラージュ①～⑤），草原（コラージュ①～③，⑤），水の流れ（コラージュ①～④）などに表現されていた。また，コラージュ①では静かで動きがない印象の水の風景であったが，コラージュ②では，迫りくる緑や激しく飛沫を上げて流れる川，コラージュ③では流れ出る噴水など，生き生きとした躍動感が感じられるものへと変化している。コラージュ③の流れ出る噴水のパーツは，街中の広場の風景であり，人物は映っていないものの，人の気配が強く感じられるパーツである。これらの変化は，A さんの動き出した内的世界を象徴していると思われる。さらに，乗り物のパーツについても，コラージュ④で飛行機と手漕ぎボートが初めて出現するまで選択されなかったが，川や林道を登っていく手すり（コラージュ②），ダイバーが蹴り出すフィン（コラージュ③）からも同様に，A さんの動き出した内的世界が推察された。

また，毎回，エネルギー備給の象徴として果物（コラージュ①，④）やケーキ（コラージュ②，③，⑤）など甘いものが貼られた。孤独感や不安感でいっぱいの心を満たす役割であったと考えられる。

自然風景，川や海などの水の景色は毎回使用され大きく配置されたが，人物は後ろ姿の二人（コラージュ③），ダイビングスーツ姿の二人（コラージュ③），暗がりの中の数人の人影（コラージュ④）の，いずれも小さく表情が見えないものであった。対人恐怖症者の表現特徴について，服部（1999）は，人の顔や体を何かで覆った，または隠したパーツが貼られることが多いと報告している。A さんの選択したパーツは，人の顔や体を何かで覆ったり隠したりはされていないものの，顔や体がはっきり見えないという点で，似通っている。これは，対人関係を避け他者への強い拒否感と不信感を抱き続けてきた A さんの内面が表現されているとも考えられる。しかし，コラージュ①，コラージュ②では全く人物を選択しなかった A さんが，小さく表情が見えない人物を配置し，

対または複数の人物だったことは，対人関係への期待や希望が窺え，同時に，対人関係を持つことに対する不安が感じ取られる。

コラージュ①で「これは私」と，寂しげな“ふくろう”に自分自身を投影した。ふくろうの隣には黒い十字架が立ち，死のイメージも感じさせる。そのふくろうは，コラージュ④で，「もうすぐ，誕生日なんです。誰も祝ってくれないから自分で，」「どこかホテルのラウンジで一人で飲んでたら，素敵な紳士に声を掛けられたりして」，と，誕生日のストーリが展開された中に貼られた“トイプードル”へ変化したのではないだろうか。黒い縁取りで囲まれ，十字架の横にたたずんでいたふくろうが，明るい背景に柔らかそうなクッションを背にして，かわいらしいリボンをつけ気持ちよさそうに伸びをしているトイプードルへと変化し，同時に，自分自身のイメージも変化していったのではないだろうか。

コラージュ④の飛行機は，コラージュ⑤で飛び立ち，象徴的に空へ重ね貼りされた。また，大空を飛ぶ飛行機とヨーロッパの街並みのパーツの下に，手のひらに載せられたフルーツタルトが挟み込まれ，これまでの重ね貼りと比べると，構成に面白みが加わっている。不潔恐怖のため他人の手が触れた食べ物を受け付けなかったAさんが，手のひらの部分を切り落とさずに貼ったことは，大きな変化であると考えられる。また，構成の面白み，と言う点は，コラージュで遊ぶゆとりが出てきたとも考えられる。これは，山上（2014）の，重症強迫神経症の男性の事例や社会恐怖の女性の事例で，面接後期に見られた表現と通ずるものである。

全作品を通して，高い表現力と統合性，コラージュへの親和性が見られた。

(3) 継時的側面

5枚のコラージュ作品を，継時的に検討する。コラージュ①では，爽やかな自然風景と暖かみのあるキャンドルと対照的に，ふくろうに自分自身を投影し，両化的な感情が表現されている。コラージュ②では，さらに自然風景が増加し，また小鳥，対の蛍，親子の羊と生き物も増えている。小鳥のみ1羽であるが，

明るい印象のパーツであり，自己イメージが，前回のふくろうから変化したものとも考えられる。急流や近景の川や住宅地からは，動き出した内的世界が窺える。コラージュ③では，メッセージ性の強い文字が貼られ，初めて人物が選ばれた。人物は全て対であり，ハート型にくり抜かれたパーツが印象的である。他者との交流への期待と強い意志が窺える。コラージュ④では，それまで9枚が続いていたパーツ数が12枚になった。また，初めて乗り物も選ばれた。大空へ飛び行く飛行機は，「あっという間に別世界に行ける」ものであり，ボートは手漕ぎであり，自分の力で進んでいくものである。これらのことから，Aさんの内的エネルギーの高まりが窺えた。自分の誕生日を祝うかのような作品は，コラージュ①で垣間見えた孤独と死のイメージが一転している。その後2回，Aさんの希望でコラージュ制作を休み，心理面接を実施している。非言語のコラージュ制作の中で，自分の想いを整理し，メッセージを象徴的に発信してきたAさんであったが，言語でのやりとりが可能となり，Aさん自身も直接の対話を求めるまでに心理的に回復したと考えられる。その結果，コラージュ⑤は，象徴的な飛び立つ飛行機の重ね貼りと，手のひらに載せられたフルーツタルトが遊びの要素を含み，未完成で終えている。

日常生活では，一旦は受諾した自宅への訪問看護を拒否し，落胆と諦め，また少しの希望を持ち訪問看護ステーションへ出向いたAさんの複雑な心境が，コラージュ①に表現されている。その後支援が定着し，少しずつ外出が可能になり，コラージュにも動きが出てきた。さらに，対人関係への期待や希望が高まり，大きな一歩を踏み出すために，コラージュ③で，「この30年何やってたんだろう。返して欲しい…」と，封印してきた過去の振り返りを始め，次の回はコラージュ制作を休み，心理面接を実施した。その後制作されたコラージュ④では，色彩もパーツ数も最も多く，海外旅行への希望や誕生日への期待感が語られている。その後2回は心理面接を実施しており，海外旅行への不安を具体的に言語化し，旅立って行った。最後に制作されたコラージュ⑤では，海外旅行を成し遂げた自信と心のゆとりが感じられた。中原（2012）は，60代女性の事例を通して，「創造的退行を足掛かりに残存能力や感情が蘇り，自己対

話を繰り返しながら本来の芸術的志向性を賦活させた」と考察し，その要因にセラピストの見守りとコラージュ療法が有する遊び要因を挙げている。また，緒方・楡木（2008）は，中年期男性へ10回のコラージュ療法を実施した結果，生育や今後の生き方の見直しと未解決な問題と葛藤の整理を行い，主体的なアイデンティティの獲得へ向けての模索と軌道修正を行うことで，うつ症状の緩和と中年期を受容することが可能となり，危機的な状況を乗り越えることができた，と報告している。これらの事例経過には，本事例の経過と通ずる部分が多く見られた。

このように，コラージュ表現と内外的世界が連動し，回復と再出発のプロセスが窺われた。

2．アロマオイルの使用

本事例では，コラージュ・ボックス法施行の際，Aさんの嗜好性を受けアロマオイルを使用した。福島（2011）の調査では，オレンジ・スイートが半数以上の被験者に好まれ，すっきりしながらもやわらかいイメージが持たれていることが明らかになっている。また，好きな精油を選択してアロマコラージュ療法を実施した場合，制作直後と1週間後のいずれも，作業の楽しさ，香りの満足度において，高い得点が得られた一方で，セラピストが提供した精油（ラベンダー）を使用した群は，嗜好にばらつきがあり，得点が伸びなかったことも明らかとなっている（福島，2015a）。本事例では，10種類からその日の気分で選択してもらった結果，オレンジ・スイートが最も多く使用された。また，本事例では，海外旅行へ行く際，お守り代わりにアロマオイルを染み込ませたティッシュを持参したが，福島（2015b）の調査で被験者から聴かれた，「カウンセリングを思い出しながら香水を嗅いだりコラージュを眺めると落ち着く」などの感想と重なるものである。アロマオイルの使用については，香りが面接室からもれる心配があることや，すぐ次の面接が入っている場合に香りを消すことが難しいなど，課題も多い。しかし，Cl.の自宅での使用については可能性が高く，アウトリーチでの活用が期待される。

3．アウトリーチにおけるコラージュ・ボックス法の可能性

筆者は，多職種アウトリーチスタッフを対象とした調査で，心理職の参入が求められている一方，専門性が他職種に伝わり辛い現状を明らかにした（仲，2015,2016a）。また，訪問支援サービス利用者を対象とした調査では，通院同行や服薬管理，日常生活支援など，様々な支援の中で群を抜いて“話しを聴いてほしい”というニーズが最も高く，臨床心理士の傾聴スキルを活かした役割があるのではないかと考えた（仲，2016b）。そこで，看護師，作業療法士，精神保健福祉士等の多職種が在籍する訪問看護ステーションにおいて，臨床心理士の具体的介入事例を報告し，利用者の語りを十分に聴く支援を通して，差し障りのない範囲の自己開示，専門家としてではなく人として向き合うこと，柔軟で緩やかな枠や距離感を維持することの重要性と難しさについて考察した（仲，2018）。しかし，“語ること”が難しいCl.も多く存在する。無意識の世界での自由な語りを可能とするコラージュ体験は，Cl.の世界を守り，Th.とCl.をつなぐ媒介としての役割があるのではないだろうか。

心理職が国家資格となり，専門家による心のケアが広く必要とされている今，臨床心理士はその専門性やアイデンティティを再度確立し，公認心理師と共に社会に貢献し得る存在となるべく日々の臨床や研究により一層励む必要性があると考える。併せて，精神科アウトリーチという，心理職にとってまだまだ新しい活動の場において，どのように多職種と協働し，利用者のニーズに沿った効果的な支援を提供できるのか具体的に示す必要性があると考える。「持ち運べる箱庭」（森谷，1988,1993,2012）であるコラージュ・ボックス法を用いた本事例は，精神科アウトリーチにおける臨床心理職の支援の具体例として，一つの示唆を与えることができたのではないだろうか。

4．課題

コラージュ療法の問題点として，青木（2005）は，「何が解釈・理解でき治療（援助）に繋がったか理解できない」と指摘している。コラージュ作品の理解において，Th.およびスーパーヴァイザーの解釈に留まっているという限界がある。

また，中原(2008)は，「自由度の高さゆえに退行を促進しすぎることもあるため，導入には慎重な見立てと準備，フォローアップ，実施や解釈の訓練が必要である」，と，Th.の研鑽について言及している。Th.の慎重な見立てとスキルの修得及びスーパービジョンが欠かせない。さらに，加藤（2011）は，数量的検討と実際の事例からの総合的な解釈の重要性を述べている。コラージュ作品から得た情報を，他職種にどのように客観的かつ分かりやすく伝えていくことができるのか，また，どのように援助に結び付けていくことができるのか，更なる研究が必要である。

付記

本論文は日本保健福祉学会第31回学術集会の研究報告を加筆修正したものです。当日貴重なご意見をくださった先生方に感謝いたします。

文献

青木智子（2005）．コラージュ療法の発展的活用－個人面接・グループワークの事例を中心として－．風間書房．

福島明子（2011）．精油を用いたアートセラピー「アロマコラージュ療法」の開発－フレグランス及びコラージュ作品の検討．アロマテラピー学雑誌，11（1），25-40.

福島明子(2015a)．アロマコラージュ療法で製作したフレグランスによる心理・社会・身体的効果．アロマテラピー学雑誌．15（1），39-53.

福島明子（2015b）．アロマコラージュ療法－香りを使った初めての本格的なアートセラピー－．Aromatopia : the journal of aromatherapy & natural medicine, 24（2），53-57.

服部令子（1999）．対人恐怖症者の表現特徴　森谷寛之・杉浦京子（編）現代のエスプリ（コラージュ療法），386，143-152.

加藤大樹（2011）．コラージュ療法・ブロック技法における研究の動向と今後の展開．金城学院大学論集　人文科学編，8（1），1-10.

松永寿人（2012）．強迫性障害の現在とこれから－ DSM-5 に向けた今後の動向をふまえて－．精神神経学雑誌，114（9），1023-1030.

森谷寛之（1988）．心理療法におけるコラージュ（切り貼り遊び）の利用．精神神経学雑誌，90（5），450.

森谷寛之（1993）．砂遊び・箱庭・コラージュ－箱庭療法とコラージュ法に関する雑感－．森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康弘（編）　コラージュ療法入門．創元社.

森谷寛之（2012）．コラージュ療法実践の手引き－その起源からアセスメントまで．金剛出版.

中原睦美（2004）．ターミナル領域におけるコラージュ法　飯森眞喜雄・中村研之（編）　芸術療法実践講座 1　絵画療法㈱　岩崎学術出版社，115-134.

中原睦美（2008）．6：コラージュ・ボックス法．小山充道（編）必携　臨床心理アセスメント．金剛出版．364-366.

中原睦美（2011）．選択性緘黙 2 事例とのプレイフルなコラージュ・ボックス法の展開－三人で語り合う関係で発生したパーツ持参の意味を通して．コラージュ療法学研究，2（1），17-28.

中原睦美（2012）．コラージュ制作体験により芸術的志向性が賦活された 60 代女性の事例－外科領域でのボックス法導入事例を通して－．コラージュ療法学研究，3（1），3-14.

仲沙織（2015）．「包括型地域生活支援プログラム」従事者が心理職に求めること－あるチームの半構造化面接から－．福岡大学院論集，47（1），33-51.

仲沙織（2016a）．「包括型地域生活支援プログラム」のスタッフが心理職に求めること－質問紙調査を用いて－．病院・地域精神医学，58（3），277-285.

仲沙織（2016b）．アウトリーチサービス利用者のニーズから見た心理職の可能性の検討 . 日本保健福祉学会誌，23（1）,65-72.

仲沙織（2018）．精神科アウトリーチにおける臨床心理士の支援に関する一考察－ 10 の事例から見えたもの－．心理臨床学研究，36（2），120-130.

緒方一子・楡木満生（2008）．完全主義パーソナリティーが中年期のうつ病に

与える影響－コラージュ療法とSCTの適用事例について－．産業カウンセリング研究，10（1），1-11.
杉浦京子（1994）．コラージュ療法．川島書店.
山上榮子（2014）．コラージュの見方・読み方心理臨床の基礎的理解のために．ナカニシヤ出版.

論文要旨

Interviews with a woman in her 50s having obsessive-compulsive symptoms – Using the collage-box method

NAKA Saori

Five collage works made by a woman (A) in her 50s having obsessive-compulsive disorders and problems in her daily life were analyzed and the process of changes in her inner world was examined. There were no protrusions in her works. Cuttings, as well as structures, were accurate, suggesting A's maturity, punctuality, artistic sense, and stability of ego boundary. Moreover, she expressed herself honestly through written messages. She chose an image of a person for the first time in Collage 3, though it was small and facial expressions of the person could not be identified, it expressed her desire to interact with others that had been kept to herself for a long time because she had been avoiding interpersonal relationships. She projected herself into an owl in Collage 1, a small bird in Collage 2, and a toy poodle in Collage 4, suggesting changes in recognition of her self-image. An image of a vehicle was chosen for the first time in Collage 4, indicating her inner world started to move. Her works expressed negative messages about her fatigue due to obsessive-compulsive symptoms and family relationships, anxiety for the future, and despair, as well as positive messages of recollecting the good times of her life, acceptance old age, and bright hopes for the future. Her inner world was affluently expressed through collage works. Overall, her high expressive ability, integration, and affinity for collage were indicated. Through the process of organizing her thoughts and sending symbolic messages in the nonverbal world, she psychologically recovered and

came to be able to communicate verbally. Furthermore, it became possible for her to go out and go on trips. Collage expressions were correlated with her inner and outer worlds, and the process of her recovery, which suggested a restart.

Key words : Collage-box method, Obsessive-compulsive disorder, Clinical psychologist, Outreach